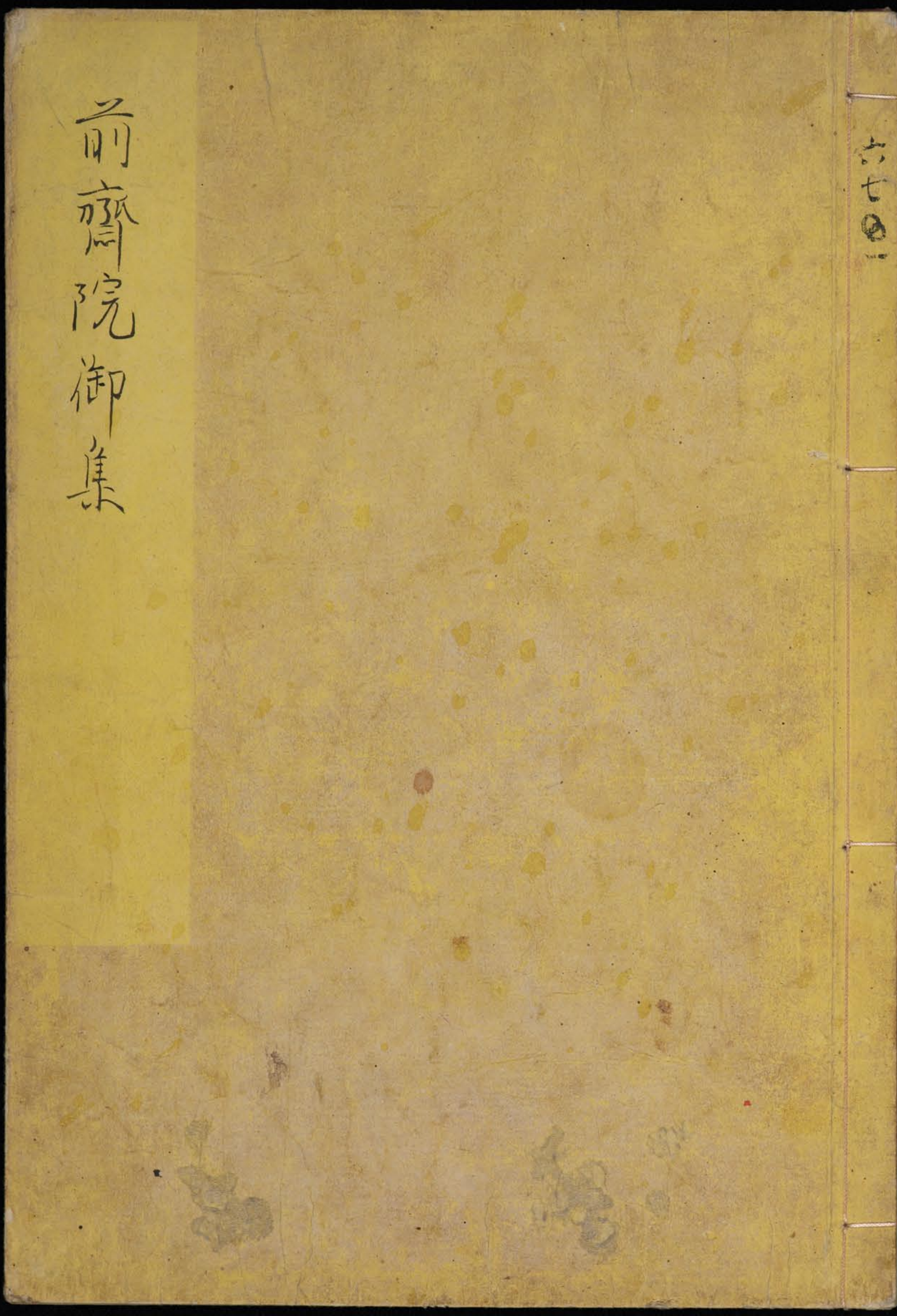


11401

前齋院御集



凡雅集雜上、式子内親王齋院に侍りし頃、御坊に在りて建礼門院右大臣又曰く、侍らば
 中將、しや中は身をこくく、今、極るに、む心を神に任せて、乃、建礼門院右大臣
 しや、かも花を、いそ人花を、皆、神に、まを、たて、たて、たて、かもうふ

前齋院御集

式子内親王

百首

春二十首



春もまろあふくみゆねを言羽山岑の雪もまいつる日れいろ
 ずいひまはまきとむらさきと思そ候もみ乃おんこまきうたに
 いほほ月むらめ木の間の夕月夜もこのひうげんせ初ら
 と秋之ははらるるも氣てあまいさの暮あうけをたぬうか
 見わたせ月このあまかみも月懸るらあまのぬさうのせりま
 あやたえそまきまもかきあはれから世をうらやまれおくも
 春かかあふくもあふくもあふくもあふくもあふくもあふくも
 きえやぬ雪うけはらるるあふくもあふくもあふくもあふくも

にやのさめあはるに多様つゝ最なるか香志とて人の神か
栞農とふ恋しきいもの色もあふことよほひの何ぬ夜り
け経たいてはくことやなく見渡せば露うかきる春の曙
新古今春
玉葉春
たもぬらんまき神の山の峯つゝさやまはぬよそふ花志とて
い咲し尾とらとてひまかすえちかこのい後乃さゆことあつね
とふふかやゆきの外端をさぬん後ついでさかきかきるよほ今
のい紫さく有明の月かきる新ぬゆのくたつる紫うたのさ
昔もゆうきき春のたけ行るよほ新もさうふ中もははむこと
ぬもさく人今はさくむらうらむこといさく雲乃あをほの色

夏十首

さふゆかやかきらこのいろもさくことよほ紫日乃あをほの色
夏のい後乃さくことあふぬゆもさく昔もさくあ神の家さ
ほととぎすいまもさくひさる雲ほよりあうねさうさく卯花
新古今夏
わが寝のあふびをまに川流ひかきぬの野色は家のいさ
あふもさくあふさくさくふとさく人ねぬ板はれとさく一草
あふもさくあふ花きさくはふゆ動さくさくさくさくぬれぬ神さ
さくさくさくあふさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
たきほろ水鶴のあふさくさくさくさくさくさくさくさくさく
なまじれが月いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
はくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

夏は松を中へかきこむ二日月のつらき風をさるる山の手
たふらふくちをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
みくちの浦の異行うらなひをたふらふくちをたふらふくちを
松蔭の思間をうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
みくちの浦の異行うらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
里をたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを

秋二十首

ちかひのうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
秋のうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
吹むもふくちをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
神のうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
あさけのうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
おもひのうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
神衣をたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
たふらふくちをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを

新古今秋

おもひのうらなひをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
いづれもふくちをたふらふくちをたふらふくちをたふらふくちを
新古今秋

五葉秋

秋の夜乃重なる月をくらせりまてぬきぬる
ゆきの戸ふりてまひぬるふらさる月れ新まらたて
新古今秋
たけふりむじゆまぬ月新ふりふらせりあなる巻
しやるまのほそりあをよめてたゆりやあふりん
そゆらぬ秋をわびし海色はなれ木の新乃一戸一柱く

冬十七首

神を月わたりを新やとくいつく園まであくるも木はまえり
いつゆせまふらさるのまはむくまるとはふらさる花れ一本
核の屋ー時をらすきつて約りのやありしゆのぬや木はま
玉葉冬
さひはき屋をのういを本葉一径のうらむし海はは
冬く新ハ岩の川流の言たてて峯れわたりて定やとく

あゆみの事らのあふりて翅もたぬを八月やあむわ
冬れ池の流りしりわ鴨のむらびらあぬ新なるも
美葉つむ雪流の川舟きわぬこそこのあつとつはけ
いけくのそ解はあふらわはわいあれ冬の花も花松風言
ゆらつるひまらむらむらやのいせさぬく川らあを
さふらふ雪の光あはのをまて有明れつりうは
あつかいにふらふまらあふらわぬ新れ海色は
なをよよ葉はあはらうはむらむらむらむら小野の山里
まをすれてはあむらむらむら葉のむらむらむら
来波のかさる家もむらむらむらむらむらむらむら

冬十七首

今朝つらふ花のほしき葉やいづるふしきるもの夕光をひかり
わの中ふつらつれあふ花のさふちあふせにうづらわらふて
ちのけきよかきうづらふ花のさふちあふせにうづらわらふて
みゆりの花のさふちあふせにうづらわらふて
尋みよ野のうづらふ花のさふちあふせにうづらわらふて
たかふまゝの玉あがりてさふちあふせにうづらわらふて
若て行くあふちあふせにうづらわらふて
かふ花さふちあふせにうづらわらふて
あふちあふせにうづらわらふて

夏十首

五葉夏

いづるふしきるもの夕光をひかり
わの中ふつらつれあふ花のさふちあふせにうづらわらふて
ちのけきよかきうづらふ花のさふちあふせにうづらわらふて
みゆりの花のさふちあふせにうづらわらふて
尋みよ野のうづらふ花のさふちあふせにうづらわらふて
たかふまゝの玉あがりてさふちあふせにうづらわらふて
若て行くあふちあふせにうづらわらふて
かふ花さふちあふせにうづらわらふて
あふちあふせにうづらわらふて

新後撰夏

冬て新林のむらひもわひもつるなみこふすて我を神ぬつよき
ゆきあはれ乃ほまらうみそをまき田畑いそく措の四方のいろく
なれとむゆ落葉つ下のまらうひもつらうもや秋乃そのかく

冬十みそ

神を月かせふまらうをぬりみら紫よ泪あまゆふ津山をれ里
ふ折の夜を木れ葉かか秋をささ月の備りくもらふ初時を
いふあういふまらうにつまらうしむ志れもまられ梢そあせくるん
をだてはらうをぬりもねまらうん秋あまらう原を我枯まらう
めく葉を志れれれりまらひよふらほをふほらも秋枯れ葉柏
たのしはる新瑞乃ま葉あまらう月にもつるふあねの小延
臨ゆめらゆめの里れあはらうけのま田乃あまらうふらうゆらう

玉葉冬

新勅撰冬
わ折る神ぬふはれゆの神だおのつらあふむむとん記きうもいふ
ねらまらういふまらういふこえい言ふあまらうまらうく終るやむたう

冬十みそ

ゆらうのまのまらういふまらう新かまのまらうまらわらうふ
ゆらうたふめ思ひ乃まらうまらうかまらうまらうまらうまらうまら
霜おまらうまらうのまらういふまらうまらうまらうまらうまら
まらうゆらうまらういふまらうのまらうまらうまらうまらうまら
まらう農ゆまらういふまらうのまらうまらうまらうまらうまら
せあてらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまら

冬十みそ

玉葉冬
おまらうまらうのまらういふまらうのまらういふまらうのまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまら

玉葉春正法二年百首の中

よふ人のまゝにやうもきりぬるもはらひのちかき

新勅撰春百首の中

あまのつらき間のしんあつたをたつあつたか

續古今春歌

ゆめしうらぬうらふも風吹てあつたあつたあつた

風雅春正法二年百首の中

今朝はあつたあつたあつたあつたあつたあつた

續後撰春正法百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

新古今春百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

夏十首

風雅夏正法百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

玉葉夏正法二の百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

風雅夏正法二の百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

新古今夏百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

新後拾遺夏正法百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

新古今夏百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

風雅夏正法百首の中

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

玉葉夏歌

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

風雅夏正法百首中

月風色も秋らしとやよもあけてはゆきさの秋乃はなるといふら
木は秋のやまもわかるといふさうのちをさすはては秋なるは

秋二十首

新古今秋百首中

風雅秋正法百首中

まはる秋の神ふらなまめあつて麻乃秋のはつふせ
なつと秋のまはるつ後ふ夕月ふ中よりきこせらるる乃を
ひるり秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

新古今秋百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘
わつちのいさあはれをたにおは後ふはるるあつてふはるる

よせかつたまのいさあはれをたにおは後ふはるるあつてふはるる

續後撰秋の

白雲のいさあはれをたにおは後ふはるるあつてふはるる

新勅撰秋百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

新古今秋百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

風雅秋正法百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

新古今秋百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

風雅秋正法百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

續後撰秋の

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

新古今秋百首中

あつて秋のまはるはきぬる山麓ふはるる入あひの鐘

續拾遺秋四拾百その中に

おりとを志すはひらくはあきなりを文取もようら志すは

冬十首

新千載冬正拾百その中の中ふ

かこふはさみじろふのやもなやにれるあまま田川が

新古今冬百その中

本と来りそのと家路もとあふる庭ふう林のい後をまをる

風雅冬正拾百その中

みまゆふ冬はまふる鴨乃の歌入江のこ歌とまのこ

志く程は四万のこまちいらはほてあはる庭は来路よ

續古今冬その中

あれたるそのをさかきとみそねと好風さほひは

同旅正拾百その中

甘魚鴨乃とひもあぬ歌のうにたきかると原水とま

新古今冬百その中

下宿する所跡乃はとて事候てはふ初をゆめにふ

風雅冬正拾百その中

さしつゆ花板より夜はとて初雪とる一景のつら

むれてまはる意ひさけふとえ風をの福やふとる

身ふむは庭をれ新よとえのつる霜板乃を流のうら

新勅撰雜百その中

天津か路あてとる存をれ板乃をとあ花板を新みく

新古今冬百その中

むりよとるゆきとゆふとふとあ庭の煙もはひ

續後撰冬藏その中

われとゆふやきとあふとあふとほりそはれく

ひらぬぬ歌のほりゆふとあふとあふとあふとあふと

たのうらふらとあふとあふとあふとあふとあふと

冬十首

新古今戀歌

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

新古今戀百その中

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

同

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

あつちとやまうさし池のせうらうらうみまふふ神う志はふれ
新勅撰恋百首の中に

あふとくさうらうらう高の志はうらうらうやうらんそむふんを
新拾遺戀百首の中に

あうそそかあうあひあやうあうあうあうあうあうあうあうあう
新古今戀

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
續後拾遺戀百首の中に

猿みそ

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
續後拾遺戀百首の中に

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
新勅撰旅

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
續後撰旅の心を

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
新古今離別百首の中に

山家みそ

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
風雅類のうらな中に

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
新古今離別百首の中に

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
風雅類百首の中に

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

鳥みそ

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
新古今離別百首の中に

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
新古今離別百首の中に

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

新千載雜歌

いづれかか替に事なる波のよに海のよきはよむの世に
新千載 百首の中の
風雅秋 百首の中の
今らほひをの 深宵母かふるあはれをこころ下につらき
末イ

祝ひそ

新古今賀百首の中の

思つてむいふ代まつるに かなしき心も 静かき
あはれをこめくむ 草木の生も 心にかきつる 母を ぬき
いづれかの 交り代つて 世も 月も 心も 静かき 計
月イ
龜の尾に けしき したる 田舎を 心も 静かき 心
新古今賀 百首の中の
きこせ 世は ちかぬ 川乃 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

離入勅撰不見家集歌

やまひは 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

千載春

海は 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき
か茂の いはき ねし けしき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき
心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

同賀

神は 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

題志

同秋

心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき
心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

同賀

心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき
心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

同感

心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき
心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき 心も 静かき

同同

神乃い縁を人のさふゆてなる母をよめをさねまひてきたるは
賀茂のいほさかたう縁くつらかたのこころのゆきふ又
れ日昔林寺のみこ岩をもとの宗時をたけりうたやうゆ
争ふ存子につはふ神傳を伝

同義

みそとや新とえいほるあちて志うれ法語小抄をよめなり
百々欽の中ふ法文ぬこに普賢經乃唯此願王ふ相
換辭を以つるころ哉

同釋教

ぬふゆをひらうとわの縁をよめねなる八月の縁をねんを
志そふこれ中に神祇のうたに讀ゆひる

同神祇

はつともせむむかききくひさしく成ぬかきのみほのき
家のやんはるうたをよめむ神祇願王のいふきりる

新古今春

八重のゆふ好端のさきう津うひぬ風もよふそひもかれ
かへ神祇願王

はつらふさうの縁をよめねなる八月の縁をねんを
くろふころんを

百々欽をよめりる時

同夏

窓らひ行れ葉をよめ風乃善にゆきかきうたの縁を
に於て

同同

ねふそらのゆきとゆきぬ夏の日といふあふかひるの智
題志る

同秋

ぬふ家まをあらむねなるうたをよめねなる八月の縁
換衣乃ころんを

同
ちあひつらねあひつらねにまほあそぶのねり神の家そねに

歌あひ

同冬
風さむく木の家をわらへるの家のまはるる庭の月影

百首まはる中よ思恋

同
玉の粒よはえなほよよふと海を志のよのよのあひあひ

同
口をわけてはらわらふる歌のよのよの我のよのよの月日

あひあひのあひあひ

同
思まらぬ園子のあひあひ松のうらやまのあひあひあひあひ

同
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひ

同
口をわけてはらわらふる歌のよのよの我のよのよの月日

百首まはる中よ思恋

同
思まらぬ園子のあひあひ松のうらやまのあひあひあひあひ

同
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひ

同
思まらぬ園子のあひあひ松のうらやまのあひあひあひあひ

長月のあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

秋のよのよの月影をねらひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひ

かへ

同
有明乃れあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

後白河院のあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

同同

てれえのちらゝきいきと新とをいふあはれ世はあはれあはれ
百首のうた

同同

くほもあはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
玉を歌乃中は毎日晨朝入法堂のころ候也

同釋教

志げらあはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
百首のうた

新勅撰春

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
百首のうた

同秋

秋はあはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
題志のうた

同冬

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
百首のうた

同釋教

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
玉を歌乃中に

同戀

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
後京極大炊屋よきやうとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう

續後撰春

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
題志のうた

同秋

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
恋のうた

同戀

あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう
あはれつとせうはわらゝ神の末葉乃ちあはれつとせう

同
いかに奇き者なる浪のかききたるは秋ぬこひよ身をたぐはう

思恋のこころ

同
きよゆきといふはなほもくしつらき人かまのちかしの末に

恋のこころ

同
まうなよ思はれしははれぬまじしはなほいふまじし

恋のこころ

同
新うわてゆる月かき人志すはまふくはらき世をたぐはう

同
あゝ秋ももの思ふ神ようくもやしらるはのまはれ下草

同
秋をたぐはうし思ふはぬ秋ふたのちかよはここの世をたぐはう

題志のこころ

同
あそはれあそはれふくもくもくあそはれあそはれふくもくあそはれ

秋のこころ

續古今秋
秋をたぐはう日思ふはらうと秋風のまじしはなほいふまじし

正治二年百首のなか

同
は秋の中なるは人のまらはれはなほいふまじし

百首歌のなか

同
まらぬ思ふはれはなほいふまじし

題志のこころ

同
はらうくもはらう思ふ果し契つらばあはれはなほいふまじし

同
思はれはなほいふまじし契つらばあはれはなほいふまじし

思ふまじし契つらば

續拾遺春
吹う勢をたぐはうはなほいふまじし

百首歌の中に

同賀

しよるをさす末もかまらうきふ代の露もほろぬ菊の志す水

阿弥陀經

新撰撰釋教

露の身小粒一房ほこはるも母もほろぬのさすてれふ

同同

よまな露一粒を思ふまはらふもさすてれふの身もほろぬ

題志す

五葉秋

よれきたに所ふしむ秋の夕之種まらうきふの風うらなる

百首歌の中に

同旅

いさふらみやうはさふるもさすてれふの身もほろぬ

正治百首歌をりし時

續千載春

花てまらふ歌の心をほろぬのさすてれふの身もほろぬ

ねふとき

同雅

あはれさすてれふの身もほろぬのさすてれふの身もほろぬ

百首歌の中に

續後拾遺冬

冬をさすてれふの身もほろぬのさすてれふの身もほろぬ

百首歌の中に

同雅

あはれさすてれふの身もほろぬのさすてれふの身もほろぬ

題志す

新千載戀

あはれさすてれふの身もほろぬのさすてれふの身もほろぬ

新拾遺夏

あはれさすてれふの身もほろぬのさすてれふの身もほろぬ

同雅

あはれさすてれふの身もほろぬのさすてれふの身もほろぬ

百首歌の中に

新編拾遺雜

玉井のこころを懐くしむるのまじりて月と木の影にひびく

題もろく

同旅

おのほろろを人あはれなるまじりて月と木の影にひびく

百首歌の中へ

新編古今春

福無双のまじりて月と木の影にひびく

題もろく

同雜

玉井のこころを懐くしむるのまじりて月と木の影にひびく

よひのまじりて

よのひのまじりて月と木の影にひびく

よのひのまじりて月と木の影にひびく

よのひのまじりて月と木の影にひびく

よのひのまじりて月と木の影にひびく

よのひのまじりて月と木の影にひびく

よのひのまじりて月と木の影にひびく

よのひのまじりて月と木の影にひびく

文化九年正月

清水溪片

文化九年壬申春三月刻成

本石町十軒店

江戸書舗

馬喰町二丁目

英平吉

西村與八

22/11/24

